

G&#246;tz, S. (2019) - sugiura (2021 年 10 月 22 日 10 時 30 分 02 秒 )

G&#246;tz, S. (2019). Filled pauses across proficiency levels, L1s and learning context variables: A multivariate exploration of the Trinity Lancaster Corpus Sample. International Journal of Learner Corpus Research, 5(2), 159-180.

=====

Trinity Lancaster Corpus を使って、filled pause (er と erm) の頻度を調べて、その出現が、学習者の熟達度 (CEFR のレベル) や、年齢、学習開始年齢、出身国、試験官の経験によって予測できるかを検証。

レベルが上がるにつれ減ることは確認できたが、その他の要因の影響力が強い結果となった。最大なのは「出身国」。この要因を「出身国」と呼ぶのがふさわしいか疑問。

要因間の交互作用はなかったと書いてあるが、詳細が書いてないので、本当かどうかわからない。検証できない。

分析方法は、Gries の multifactorial regression modelling と classification tree とあるが、詳しい情報が書いてないので、わからない。検証できない。

二つ目に CART による決定木分析で、レベルわけができたけれど、説明率は 4%。

試験官の経験を要因に入れた理由が理解できないが、結果的にそれが影響するとなったら、それはそれで試験の仕方に問題があることにならないか心配。

unfilled pause つまり何も言語表現のない無音状態と合わせて分析すべきではないかと思う。が、それが、TLC でどのようにトランスクリプトされているのか不明。